講 演 の 概 要

大阪市立大学医学部を卒業してから、最後の勤め先となる公益社団法人日本 WHO 協会の理事長職を勇退されるまでの貴重な体験談を語られた。

仕事に対しては、OJT（On-the-job Training）、職場こそが最も効率的に学ぶことができ、また、自分を鍛え磨き上げるところ、という考えを持っており、大学医学部を卒業して初めて和歌山県の町立病院に勤めた時は、終日診察を行い、検査なども一人で行いながら、いろいろなことを学び、身に着けていく、まさに On-the-job で行っていた頃であった。

身をもって知ったこのような体験が、後々非常に役に立った。

母校の大学病院に戻ってからは、上司である教授に患者の現状を知ることの大事さを教えられ、往診することの重要性を繰り返し説かれた。また、よく意見を求められ、最近の概念である、上の者も下の者も共に成長していく OJD（On-the-job Development）を先取りしたような形で指導していただいた。

次に赴任した桃山市民病院では、統合移転の問題があり、住民の説得などに出向いたことが行政にかかわるきっかけとなった。また、当時としては、聞きなれない老年医学とはどのようなものなのかを知るために、英国スコットランドへ医学研修に行った。そこで医療従事者のみならず、その他の職種の方々も一丸となって患者一人をアセスメントし、病状だけではなく生活面までもケアーをする手法を知り得たことが、帰国後、非常に役に立った。

そのような経験もあって、その後 WHO の仕事についた。WHO 憲章における健康の定義「健康とは、身体的、精神的、そして社会的に全てが満たされた状態」の中の社会的という文言に惹かれて WHO に入ったが、現在では、その健康の定義が現状とそぐわない状況になってきており、健康の定義を一度見直し、再考する必要があるのでは、ということで講演の最後を締めくくられた。